学会の役割を考える：科学基礎論学会の学術誌刊行に関する議論を通して

Roles of academic societies: Based on discussions about the publication of academic journals by the Japan Association for Philosophy of Science

菊池 誠¹

KIKUCHI Makoto¹

1 神戸大学大学院システム情報学研究科（〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1）E-mail: mkikuchi@kobe-u.ac.jp

1 Graduate School of System Informatics, Kobe University (1-1 Rokkodaicho Nada-ku Kobe-shi, Hyogo 657-8501)

原稿受理 (2012-12-25)

情報管理 55(12), 874-881, doi: 10.1241/johokanri.55.874 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.874>)

著者抄録

科学基礎論学会はわが国の指導的な科学者や哲学者によって1954年に設立された数学や心理学、工学を含む広い意味での科学の基礎や哲学について論じる学会であり、1954年から和文誌を、1956年から欧文誌を刊行している。本稿ではまず科学基礎論学会の欧文誌刊行の現状を例に、わが国において人文社会系の研究分野で欧文誌を刊行することの意義と難しさについて論じる。次に、学術誌の標準的な評価基準となっている被引用数と採択率を改善するための方法を紹介し、このような数値的指標によって学術誌を評価することの問題点について論じる。最後に、学術誌と学会の役割の多様性と、それらの協力の重要性について論じる。

キーワード

学会, 学術雑誌, 採択率, 被引用数, 評価, 科学哲学, 人文社会学, 科学基礎論学会

1. はじめに

科学基礎論学会は1954年に湯川秀樹（物理学）や末綱愨一（数学）、高木貞二（心理学）、下村寅太郎（哲学）らによって設立された、数学や心理学、工学を含む広い意味での科学の基礎や哲学について論じる学会である。19世紀末から20世紀初頭にかけて、物理学や数学をはじめとする科学のさまざまな領域においてわれわれの世界観を変えてしまう大きな変革が起きた。その変革の中から生まれた科学の基礎

に関する問題について科学者や数学者、哲学者は長い時間をかけて数多くの議論を繰り広げ、20世紀後半には「科学哲学」と呼ばれる哲学の中の1つの独立した専門分野が成立した。科学基礎論学会とは哲学者とともに科学者や数学者が科学の基礎や哲学について論じることを目的とした学会であり、現在、およそ500名の会員を擁している。

科学基礎論学会の主な活動は学術的会合を年に2回開催すること、会員の投稿論文による和文誌と会員外からの投稿も認めている欧文誌を刊行すること、

そして、それらの学術誌に掲載された論文に基づいて若手研究者に奨励賞を授与することである。学術的会合では毎回、多数の講演が発表されて熱心な論戦が繰り広げられており、和文誌の刊行も堅調である。学会の会計にも大きな問題はなく、学会の活動そのものは活発で順調であると言えよう。しかし、科学基礎論学会の欧文誌は幾つかの大きな問題を抱えている。その中には科学基礎論学会に固有のものもあれば、わが国において欧文誌を刊行することに関わる一般的なものもある。そして一般に、学術誌の刊行は学会の大きな役割の1つであるため、学術誌の刊行に関わる問題を考えることは学会の役割を考えることと切り離すことができない。

2. 哲学系欧文誌の現状

2.1 科学基礎論学会の欧文誌

科学基礎論学会は設立と同時に和文誌『科学基礎論研究』を創刊し、その2年後に欧文誌『Annals of the Japan Association for Philosophy of Science』を創刊している。また、和文誌に掲載された論文は直近の数年分以外のすべてがJ-STAGEにおいて、欧文誌に掲載された論文はすべてがCiNiiにおいて無料で公開されている。母国語以外での論文執筆が難しい哲学という研究分野において60年近くにわたり完全な欧文誌をわが国で定期的に刊行し続けてきたことや、学会の資産ともいうべき掲載論文を無料で公開していることは誠に誇るべきことであろう。

この科学基礎論学会の欧文誌は世界的に著名な研究者による質の高い論文も掲載してはいるが、残念ながら幾つかの問題も抱えている。特に大きな問題は論文の投稿数が少ないこと、読者が少ないこと、そして経費の負担が大きいことである。大きな流れを見ると本学会の欧文誌への論文投稿数は減少傾向にあって、かつては年に2冊刊行していたのが現在は年に1冊刊行することが精一杯であり、ここ数年、この傾向はさらに強まっている。また、実質的には会

図1 『科学基礎論研究』の表紙

図2 『Annals of the Japan Association for Philosophy of Science』の表紙

員への配布以外の購入先は国内の大学図書館等に限られているため、掲載論文を世界中の多くの研究者が目にするような状況にはない。そして、国内外の哲学系の他誌と同様に論文の掲載料を取っていないため、刊行のための費用はもっぱら学会員の年会費によって賄われており、その費用は学会の出費の大きな割合を占めている。

理工系、人文社会系を問わずわが国には欧文誌を刊行している学会は少なくない。その中には大きな成功を収め、欧米の一流誌に引けを取らない充実したものもある。しかし、わが国で刊行される大概の欧文誌は多かれ少なかれ問題を抱えていて、その問題はおおむね上の3点に要約できよう。そして、こうした問題は人文社会系の欧文誌、特に哲学系の欧文

誌において強く現れるものであり、その意味で、科学基礎論学会の欧文誌の抱えている問題は、わが国において人文社会系の欧文誌を刊行することの問題の典型であろう。

2.2 欧文誌刊行の難しさ

欧文誌刊行に関する3つの問題のうち、学会の運営上特に問題になるのは経費負担の大きさである。ただし、盛んに論文が投稿され数多くの読者を持つようになれば、自ずから学術誌刊行に関わる収入も増えるし、そもそも会員は学術誌購読の対価として年会費の一部を支払っていると考えられるので、本質的な問題はむしろ投稿数が少なく読者が少ないことにあると言わなければならない。そして、特に哲学系の欧文誌におけるこの2つの問題の原因は、言葉の壁の存在と、学術誌の評価の低さにある。

一般に哲学をはじめとする人文社会系の研究分野では、論文の執筆には単に読み書きできること以上の高度で高尚な語学力が要求される。そのような分野において母国語以外で論文を書くことには大変に大きな労力が必要であり、結果としてわが国では哲学系の論文のほとんどが日本語で書かれている。世界一流とされる学術誌から論文を出版するのであれば話は別でも、大方の論文が日本語で書かれている現状のもとでは、国内の研究者にとって国内の学会の欧文誌から論文を出版することは大した利益にはつながらず、むしろ母国語以外の言葉で論文を書くことの負担による損失の方が大きい。また、わざわざ東洋の無名の学術誌から論文を出版したいと考える海外の研究者は珍しく、海外から自発的に論文が投稿されることは皆無に近い。科学基礎論学会の欧文誌に掲載されている海外の研究者による優れた論文も、基本的には特集の企画など編集からの投稿の誘いに基づくものである。

さまざまな分野において研究活動の国際化は著しい速度で進んでいる。海外の研究者にとってもわが国で研究活動を続け日常生活を送ることの問題や抵

抗は劇的に少なくなっており、今ではわが国の研究者は国内にとどまろうと海外に出ようと常に世界中の研究者との過酷な生存競争にさらされている。この状況は人文社会系の各研究分野も決して例外ではない。しかし、わが国の研究者に不利な条件を強い言葉の壁は逆に防波堤の役割を果たし、哲学系の一部の研究分野は国内に自立的で閉じた空間を築いていることも事実であろう。この状況は情報の流れを海外からわが国への一方向へ固定してしまい、わが国の研究成果を海外に還元できないばかりか、海外の研究者との相互的な交流によってわが国の研究成果に磨きをかける機会を奪うため、この状況を甘んじて受け入れることは許されない。もしも欧文誌の改革を通してこの状況を改善できるのなら、その改革は積極的に試みられる必要がある。

3. 学術誌の数値的指標

3.1 学術誌の評価

本来、学術誌の役割は研究成果を発表し、興味を同じくする人と語り合うための場所である。しかし、電子情報技術が発達した現在では研究者はさまざまな研究成果の伝達方法を持っており、今では論文を学術誌に掲載することの意義はむしろ研究成果に対する評価の獲得にある。評価の高い学術誌には数多くの論文が投稿されるため、他の研究成果との相対的な評価が論文の採否の判断基準になる。その結果、格の高い学術誌に論文が掲載された研究こそが優れた研究であると見なされるため、どの学術誌に論文が掲載されるかは研究者にとって死活問題である。高い評価を得ている学術誌にはたくさんの論文が投稿されて多くの読者を持つ。投稿数や読者数は学術誌の評価と直結している。

しかし、研究の優劣の比較が難しいのとまったく同じ理由で主観的になりがちな学術誌の評価も難しい。そして、学術誌の客観的な評価基準としてよく用いられるのが論文の採択率であり、採択率を計算

するための投稿数、そして、掲載した論文の被引用数に基づくインパクトファクターである。被引用数は学術誌の読者数に対応すると考えることもできて、投稿数とインパクトファクターという2種類の数値的指標を改善することは、まさに科学基礎論学会の欧文誌が抱えている問題を改善することに対応しているよう。学術誌の改革とは学術誌の評価の改善のことであり、多くの場合、それは学術誌の数値的指標の改善のことである。

ただし、インパクトファクターは掲載した論文の評価に基づいた学術誌の評価方法であるため、そのインパクトファクターを用いて論文を評価することは悪循環である。学術誌それ自身の評価と、掲載した論文の価値を測る基準としての学術誌の評価は、異なる種類の評価である。インパクトファクターは前者のための評価方法であるため、後者に援用してはならない¹⁾。後者にはそれに適した評価方法が必要である。それに、そもそも評価者に十分な能力がある場合には、論文の価値は学術誌の格など介さずに直接評価されていることであろう。

3.2 数値的指標の改善

被引用数を改善する最も効果的な方法の1つは、著名な研究者による優れた総説を掲載することである。どのような論文でもまずは背景の説明から始まるので、優れた総説は他の論文から引用される可能性が高い。そして総説が繰り返し引用されれば、その総説を掲載した学術誌の知名度も上がって投稿数も増えよう。また、投稿数を改善するもう1つの有効な方法は、学術誌名を地域性のない普遍的なものに変えて、出版社を世界的に有名な所に移すことである。聞いたこともない出版社の学術誌よりも、世界的に名の通った出版社の学術誌の方が信頼性も評価も高くなるし、そうした出版社の国際的な営業力は国内の中小の出版社とは比較にならない。この他にもさまざまな改善方法はあるが、実際にこの2つのいずれか、もしくは両方の改善方法によって評価を

高めることに成功した欧文誌の改革例は決して珍しくない²⁾³⁾。

もちろん、この2つの改善方法はどの学会にでもすぐに実施可能な容易なものではない。著名な研究者には至る所から原稿の執筆が依頼されており、無名の学術誌に優れた総説を執筆してもらうことは簡単な話ではない。また、学術誌の評価を高めるためには継続性が重要で、優れた総説を継続して掲載するためには相当な努力が必要である。こうした改革を実施するためには、そもそも海外の主要な研究者との強い人脈があること、わが国の研究実績が国際的に認められていることが必要なのであって、編集の努力だけでは如何ともし難い。出版社を替えるにしても、商業的に成り立つ見込みがなければ引き受け手もなく、確実に成功するための周到な準備が必要である。従って、このような改革に成功した学会と欧文誌はその実力によって高く評価されるべきであろう。

出版社を世界的に有名な所に移すことは学術誌の出版の寡占化を招き、さまざまな弊害が生じる可能性もある。しかし、情報発信能力の高い出版社から優れた総説が出版されることは当該研究分野における貴重な財産になるので、このような改革は数値的指標によって判断される学術誌の相対的な評価の向上という限られた文脈を離れても大きな意味を持つ。ゆえに、このような改革は積極的に試みられるべきであろう。

4. 学術誌刊行の目的

4.1 数値的指標改善の副作用

ただし、学術誌の改革として数値的指標の改善を目指すべきかどうかには細心の注意が必要である。先の欧文誌の改革例にしても、数値的指標は結果として改善されたのであって、数値的指標の改善を目指して改革がなされたわけではない。たとえ現在の学術誌の主な機能は研究交流の場というよりは研究

成果の公的な評価機構であるとしても、学術誌は対話の場としての役割を完全に失ってしまったわけではない。少なくとも科学基礎論学会が欧文誌を刊行し続ける意義は、評価機構としての役割を果たすことよりもむしろ対話の促進と、科学の基礎や哲学に関する議論の多様性の実現にある。そして、数値的指標の改善はむしろこの2つの意義を損なう可能性がある。

よほど極端なものでない限り学術誌に投稿された論文には匿名の査読がついて、掲載可になっても不可になっても著者には判断結果とともに判断理由が伝えられる。優秀な論文であれば判断は容易であるし、説明は簡単なもので構わない。面倒で手間がかかるのは掲載不可となる論文や、当落線上にある論文の取り扱いである。そして優秀な論文が数多く集まるようになれば、改訂の必要がなく、そのまま掲載できる完成度の高い論文の中から特に優秀なものを選別することが編集や査読の仕事となって、掲載不可となる論文すべてに対応することは現実的ではなくなる。査読者は論文が会える最初の有能な読者である。査読の過程は著者と査読者の対話であり、その対話は人を育て、論文に磨きをかける。しかし、投稿数が極端に増えれば編集や査読の仕事は変質し、その対話の機会は失われてしまう。

また、多数の論文の中から優秀なものを選択し掲載するようになれば、掲載される論文の取り扱う題材は必然的に時流に乗ったものに限定されがちになる。そうなれば、当該分野の世界中の学術誌は同じようなものになって、固有の価値観や問題意識のもとで議論を展開する独自性の高い論文は弾き出されてしまう。わが国にはわが国に固有の問題や考え方、価値観がある。英語を母国語としていないからこそ可能な議論もある。わが国から独自性の高い優れた研究成果を発信できる可能性があるのに、その可能性が損なわれてしまう。多様性の実現とは独自性の確保であり、独自性は高く評価すべきであると皆が言う。しかし、独自性が高ければ仲間は少ない。投

稿数や被引用数といった数値的指標と独自性は相容れる概念ではなく、数値的指標の改善を目指せば独自性が失われてしまう危険がある。

4.2 学術誌の目的の多様性

数値的指標の改善には、それによって目指していた効果が本当に得られるのか、という問題もある。数値的指標による評価の背後には「現存する多数の研究者が賞賛する論文が優れた論文である」という価値観がある。わが国で刊行する欧文誌の数値的指標を改善することは、世界中の研究者から賞賛される論文が数多く掲載される学術誌をわが国で刊行したい、ということである。もしも当該分野の世界的な学術研究の中心となる学会を目指すのであれば、このような価値観に基づく学術誌の競争に参加して勝ち残る必要もあろう。しかし、そうではないのなら、このような価値観に基づく競争に参加する前に、その競争に勝利することが学術誌を刊行することの目的に適うのかどうか見極める必要がある。

そもそも、少なくとも西洋の伝統に根ざす哲学系の研究分野では、そうした単純な物差しで勝敗が決まる競争に勝ち目はない。もちろん人文社会系でも、わが国にも国際的な水準の研究はある⁴⁾。しかし、本当に優れた研究は最初から欧米の一流誌を目指し、そのような研究の存在はわが国の欧文誌の改善にはあまり寄与しない。そして競争に負ければ「わが国に当該分野に関する学術誌や学会は不要である」という議論が起きることは想像に難くない。万が一その競争に勝てたとしても、学会の活動の改善を伴わなければ、その勝利は実質的には経済力と労働力で既存の著名な学術誌を買収することと違いはない。それは要するに、有名な学術誌の表紙に書かれている学会名や住所がわが国のものに書き換えられて、わが国に固有の学術誌を1つ失うということではない。

数値的指標の改善そのものは目安でしかない。科学基礎論学会の欧文誌についても本当の問題は欧文

誌を介した研究者間の交流の層が薄いことなのであって、投稿数や読者数が少ないことそれ自身が問題なのではない。たとえ投稿数が少なく読者数が少なくても、欧文誌を刊行することで国内の研究者と海外の研究者の間に実りのある交流が生まれているのなら、何も問題はない。重要なのは優れた論文を掲載することの背後にある、交流の確立や独自性の確保、若手の育成、研究水準の底上げといった、学術誌ごとに異なる多様な本当の目的である。その本当の目的が達成されたかどうかは数値的指標では測ることができない。欧文誌の改革は、その本当の目的に貢献しうるのかを注意深く見極めながら進める必要がある。

5. 学会の役割

5.1 研究の評価と補助

世界最高とされる著名な学術誌も、辺境の地で刊行されている無名の学術誌も、投稿された論文を受け付け、査読し、論文を掲載するという働きに違いはない。学会も同じで、学術的会合を組織し、学術誌を刊行し、研究成果を表彰するという働きに違いはない。また、学術誌に評価機構と対話の場という2種類の役割があるように、学会にも学術的会合での招待講演者を決定し、各種の賞を授与することなどによる研究の評価と、研究者間の情報交換と研究協力を円滑に進め、研究環境の整備に関わるさまざまな組織を運営するといった研究の補助という2種類の働きがある。そして、学術誌を刊行することにさまざまな目的があるように、この研究の補助という学会の役割が具体的に何であるのかは各学会の事情によって異なろう。

学会とはある意味で観念的で抽象的な存在である。大方の研究者は大学等の研究機関と学会という2種類の組織に所属している。研究者に給与を支払って研究が遂行される場を提供するのは研究機関であり、実質的には研究の補助は研究機関の役割である。

そして人事権等を握っているのも研究機関であるが、当然、その行使にあたっては研究の評価が行われる。しかし、その評価は論文数や論文が掲載された学術誌の格に基づいてなされることが多く、学術誌は学会によって刊行されているので、実質的には研究の評価は学会が担っている。研究組織と学会の間には役割分担がある。学会の役割を考えるとときには研究の補助よりも研究の評価が重視されて、それが評価機関としての学術誌の意義が注目されることの理由でもあろう。しかし、もしも学会が研究の評価の役割しか持たないのなら、その役割を担う学会は国際的な統一団体が1つあれば十分であり、各国に存在する地域的な学会はその統一団体の窓口程度の役割しか果たさなくなる。評価の公平さを重視して研究活動が競技に近づけば近づくほどこの傾向は強くなり、情報通信技術が発達すれば地域的な窓口さえ不要になる。

しかし実際には、確かに規模が大きく国際的な学会もあるし、地域に根ざして独自性にこそ特徴のある学会もある。おそらく、この多重性は単なる冗長さなのではなく、競争と協力という研究者間の2種類の関係を同時に実現するための方法なのであろう。1つの研究分野にさまざまな学会が存在していること理由は研究の補助という学会の役割を考えなければ見えてこない。そして、この研究の補助という役割を強化するためには学会の活動と、学会が刊行する学術誌との連携が大切である。学術誌の数値的指標の改善に弊害が現れるのは学会の活動との乖離が生じるときである。学会の活動に根ざさぬ学術誌の改革は方向性を見失い、学術誌を活かさねば学会の活動は力を失う。

5.2 主観的で公平な判断

今では学術誌を介さずとも研究内容について討議する方法はいくらでもある。研究の補助が学会の役割の1つであることはともかく、学術誌に関しては闘技場であるという現実がすべてで、対話の場であ

ることはもはや完全に建前に過ぎない分野も少なくないのかも知れない。また、最近是一般に、建前のもとで話を進めることは不誠実な欺瞞と考えられて、現実に即した対応と制度が求められる傾向が強い。そして闘技場であるという現実を受け入れるのであれば公平さが特別な意味を持つ。数値的指標による評価が導入されたのも公平な判断のためである。こうした数値的指標による評価は論文や学術誌に限られるものではなく、例えば「査読付き論文3本で学位」というように、学生の教育から大学の評価に至るまで、現在ではわが国における教育研究の至る所で見られるものである。

もちろん公平さは大切である。しかし、数値的指標のみによって評価を行うのであれば、数値的指標さえ上がれば良いことになって研究の意味や目的は歪んでしまう。研究分野によって事情はさまざまであろうが、少なくとも哲学においては簡便な3本の査読付き論文よりも、徹底的に考察し、丁寧に議論を展開している1本の完成された学位論文の方がはるかに高い価値を持つ。しかし「査読付き論文3本で学位」という制度のもとでは、学生にそのような学位論文を仕上げる余裕はない。現実を突き詰めていけば選択の余地も逃げ場もない不自由な世界となってしまう。数値的指標による評価に基づく判断は、誰が判断しても同じ結論が得られるという意味では確かに公平ではあるが、その判断は一面的で杓子定規であるし、そもそもわれわれが現実と感じているものは実は大きな塊の表層でしかないのかも知れない。目に映る現実がすべてであると考えすることは、誠実さというよりはむしろ想像力の欠如であり、数値的指標による評価のみによって判断することは、公平さというよりはむしろ責任の放棄である。

例えば教育と研究のように、建前と現実の二重性は研究者をとりまく世界の随所に見られる。建前と現実を明確に区別して、潔く現実だけで話を進めることができれば気分は良いし、世の中は確実にその方向に流れている。しかし、建前と現実は一瞬に

れ替わってしまう。そして、建前を通すことは現実を突き詰めたときに現れるさまざまな弊害を避けるための知恵なのであって、建前には無視すべきではない存在理由がある。ただし、能力も良識も持たぬ人が建前を振りかざして我を通す世界は、数値的指標が幅を利かす不自由な世界以上に悲惨である。現実の皮相におもねることなく学問の世界を広く深く見通せる強靱な知性と、数値的指標に頼らない主観的な評価のもとで公平な判断ができる見識を兼ね備えた人物が必要である。そのような人物を育てていくこともまた、学会の大切な役割の1つであろう。

6. おわりに

数値的指標が学術誌を評価するための絶対的な基準ではないことを、数値的指標がはかばかしくない学術誌の正当化に用いてはならない。数値的指標による評価が良くても悪くても、問題の所在は見極めなければならない。科学基礎論学会の欧文誌の問題とは単に投稿数も読者も少ないことではなく、本稿で論じた意味での学術誌の役割を十分に果たしていないことである。科学基礎論学会の目的は科学者と哲学者の対話である。現在では科学も哲学も高度に専門化されており、専門外の研究者との対話は非常に困難である。しかし、科学技術の想像を超える展開と、その展開に起因すると思われる言葉を失うしかない困難な状況を思い起こすとき、直ちに何か役に立つ方策につながるわけではなくても、科学者と哲学者の対話、そしてわが国と海外の研究者の対話の必要性は一層増しているように思われる。科学基礎論学会で刊行する学術誌が、その対話の一助となることを願っている。

なお、本稿の執筆にあたって著者は現在の社会における研究者や学会の役割に関する幾つかの重要な論考^{5)~7)}を参考にした。それらの論考の著者に謹んで感謝の念を示したい。また、本稿の執筆は著者が2012年夏に第3回SPARC Japanセミナー 2012で行っ

た講演⁸⁾ がきっかけになっている。セミナーの講演に関して大変に有益な感想や貴重な情報を下さった方々、特に林和弘氏、永井裕子氏、菊井寿子氏、喜田みゆき氏、伊藤祥氏、土屋俊氏と、本稿の著者が

現在、和文誌および欧文誌の編集委員長を務めている科学基礎論学会において本稿で取り扱った問題について議論してきた飯田隆氏、信原幸弘氏に謝意を表したい。

参考文献

- 1) 逸村裕, 安井裕美子. インパクトファクター—研究評価と学術雑誌—. 名古屋高等教育研究. 2006, vol. 6, p. 131-144. <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no6/10.pdf>, (accessed 2012-12-27).
- 2) 森田康夫. ジャパニーズ・ジャーナルについて. 数学通信. 2006, vol. 11, no. 1, p. 153-154. <http://mathsoc.jp/publication/tushin/1101/kaiho111-JJM.pdf>, (accessed 2012-12-12).
- 3) 森康維. Advanced Powder Technology誌のExecutive Editors Meeting報告. 粉体工学会誌. 2011, vol. 48, no. 8, p. 571-575.
- 4) 日本学術振興会 人文・社会科学の国際化に関する研究会. “人文学・社会科学の国際化について”. 日本学術振興会. <http://www.jsps.go.jp/j-kenkyukai/data/02houkokusho/houkokusho.pdf>, (accessed 2012-12-12).
- 5) 吉川弘之. 科学者の新しい役割. 岩波書店, 2002, 240p.
- 6) 佐藤文隆. 職業としての科学. 岩波書店, 2011, 240p.
- 7) 植田憲一. 学会とビジネスモデル, そして学術出版・講読アクセスにおけるシンメトリーについて. SPARC Japan NewsLetter. 2011, no. 10, p. 1-4. <http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/pdfper/10/sj-NewsLetter-10-2.pdf>, (accessed 2012-12-12).
- 8) 菊池誠. “科学基礎論学会における欧文誌刊行の現状と問題点”. 第3回SPARC Japanセミナー 2012. http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2012/pdf/20120725_doc4.pdf, (accessed 2012-12-12).

Author Abstract

The Japan Association for Philosophy of Science is an academic society in the field of philosophy of science in a broad sense, which includes philosophy of mathematics, psychology, and technology. The association was founded in 1954 by the leading scientists and philosophers in Japan, and it has been publishing an academic journal in Japanese since 1954 and an academic journal in European languages since 1956. In this study, we firstly analyze problems of publishing the academic journal of the association in European languages, and examine the aims and the difficulty of publishing academic journals in European languages in the fields of human and social sciences. Then, we introduce methods for improvements of the citation index and the acceptance rate of academic journals, and consider problems about evaluations of academic journals based on these numerical indices. At last, we discuss the multifariousness of the roles of academic journals and academic societies, and the importance of their collaborations.

Key words

academic society, academic journal, acceptance rate, citation index, evaluation, philosophy of science, human and social sciences, Japan Association for Philosophy of Science